

COVID-19患者におけるADL低下の特徴とリハビリテーションの効果

川道幸司[†] 上岡紗由美 矢野 歩 伊東亮治¹⁾ 佐藤千賀¹⁾
渡邊 彰¹⁾ 大久保忠義²⁾ 竹内真弓²⁾ 船田淳一³⁾ 阿部聖裕¹⁾

IRYO Vol.77 No. 5 (295-301) 2023

要旨

【目的】 COVID-19患者のADLの特徴とリハビリテーション（リハ）の効果について検討した。【対象と方法】 国立病院機構愛媛医療センター（当院）のCOVID-19専用病棟に入院した患者のうち、リハを実施した21名を対象とした。診療記録を後方視的に調査し、年齢・重症度・リハ実施日数・ICU治療の有無・転倒リスクの有無・ADL（罹患前・入院時・退院時）などを調査した。また各時期のADLからADL低下率と改善率を算出した。ADLの指標にはBarthel Indexを用いた。対象を軽・中等症群（10名）と重症群（11名）の2群に分けて検討した。感染対策は院内のマニュアルを遵守し、すべて直接介入によるリハを実施した。【結果】 リハ実施患者は259名中21名（8%）であった。重症度の内訳は、軽症：5名（24%）、中等症II：5名（24%）、重症11名（52%）であり、重症群はすべてデルタ株流行期間に入院した患者であった。リハ実施日数は、重症群（中央値：13日）が軽・中等症群（6日）より有意に長かった。全例の入院時ADL（55点）は罹患前（100点）より有意に低く、退院時（85点）は入院時より有意に高かった。重症群のADL低下率は、軽・中等症より有意に大きかった。重症群の45%が転倒リスクを経験していた。【考察】 流行株によって、年齢や重症化の程度は異なっていた。罹患前と比較して、入院時のADLは低下しており、その低下率は重症群で大きかった。重症群ではICU治療に起因する身体機能の低下や骨格筋量の減少がADL低下の要因として考えられる。入院中のリハ提供は、ADL改善に有効であった可能性がある。【結論】 COVID-19は、しばしばADL低下を合併する疾患であり、多職種によるリハ医療の提供が必要と思われた。

キーワード COVID-19, リハビリテーション, ADL (日常生活活動)

国立病院機構愛媛医療センター リハビリテーション科 1) 呼吸器内科 2) 看護部 3) 循環器内科 †理学療法士
著者連絡先：川道幸司 国立病院機構愛媛医療センター リハビリテーション科
〒791-0281 愛媛県東温市横河原366番地

e-mail : kawamichi.kouji.ys@mail.hosp.go.jp

(2023年3月15日受付 2023年10月13日受理)

ADL Impairments and the Effects of Rehabilitation in COVID-19 Patients

Koji Kawamichi, Sayumi Kamioka, Ayumu Yano, Ryoji Ito¹⁾, Chika Sato¹⁾, Akira Watanabe¹⁾

Tadayoshi Okubo²⁾, Mayumi Takeuchi²⁾, Junichi Funada³⁾ and Masahiro Abe¹⁾

Department of Respiratory, 1) Department of Respiratory, 2) Department of Nursing,

3) Department of Cardiology, NHO Ehime medical center

(Received Mar. 15, 2023, Accepted Oct. 13, 2023)

Key words : COVID-19, rehabilitation, ADL (Activity Daily Living)